芝蘭会報

第168号
発行所
社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail:info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主な内容

② 退任あいさつ・新任あいさつ
③ 校友会・KMS-FUNDだより
④ 芝蘭会の原点を検証する
⑤ 支部だより 島根・東京・神戸
⑥ 支部だより 和歌山
人事異動・会員訃報

iPS細胞研究所竣工

通称CiRA（サイラ）

基礎技術の確立や知財確保など目標

本年4月1日に設立されたiPS細胞研究所（通称CiRA＝サイラ）の開所式・研究棟の竣工式が、5月8日に吉田キャンパスで挙行されました。CiRAは京都大学の第14番目の附置研究所となります。

式典には、川端達夫文部科学大臣、坂田東一文部科学事務次官、後藤芳一経済産業省大臣官房審議官、阿曽沼慎司厚生労働省医政局長をはじめとする政府関係者、益川敏英京都大学名誉教授や竹市雅俊理化学研究所発生・再生科学総合研究センター長を含む研究者、患者団体の代表、寄附者、学内関係者など200人以上の招待者や約70人の報道関係者が参加しました。

CiRA研究棟正面玄関前で行った竣工式では、坂田事務次官、松本紘京大総長、江崎信芳理事・副学長、藤井信孝理事・副学長、吉川潔理事・副学長、光山正雄医学研究科長、中村孝志医学部附属病院長、中辻憲夫iCeMS拠点長、山中伸弥iPS細胞研究所長の9名がテープカットを行い、研究棟の完成を祝いました。その後、研究棟が公開され、見学者は熱心に研究者などからの説明に耳を傾けていました。

研究棟には動物実験施設、細胞調製施設が設置されています。

開所記念式典、祝賀会が百周年時計台記念館で開催され、世耕弘成参議院議員、山田京都府知事、門川京都市長、長谷川閑史武田薬品工業株式会社代表取締役社長、大濱眞日本せきずい基金理事長、国谷裕子京大経営協議会委員などの来賓から祝辞が述べられました。

山中所長は、これまでの支援への感謝を繰り返し述べるとともに、今後10年間の達成目標として、基盤技術の確立・知財確保、再生医療用iPS細胞バンク構築、前臨床、臨床試験、患者由来iPS細胞による治療薬開発を挙げました。

研究棟正面でテープカットする関係者

平成22年度 春の叙勲

瑞宝中綬章

北原　正章（昭28年卒）
滋賀医科大学名誉教授

池田　宣昭（昭33年卒）
元 国立療養所南京都病院長

M8以外から参加多く

世界保健サミット打合せ会議

京大もシンポジウム企画

M8アライアンスを中心とする第1回世界保健サミットWorld Health Summit, WHSについてはすでにご報告しましたが、本年10月ベルリンで開催予定の第2回会議の打合せ会議が、さる4月12日夕刻から14日の昼にかけて、ベルリンのCharitéにて開催されました。

日本からのM8メンバーとなっている京都大学医学研究科からは、光山医学研究科長と中尾評議員が出席しました。今回はM8メンバー各大学以外からの参加も多く、さらにM8関係各国の駐ベルリン大使の参加もありました。

まずM8アライアンスの今後のミッションと規模について議論されました。昨年の第1回WHSでは、M8それぞれが個別のシンポジウムを企画提供しましたが、今後もM8で維持するのか、関与する研究機関を次々と拡大（M8＋?）していくのかについては議論が分かれました。

第2回世界保健サミット打合せ会議の参加者（英国大使館公邸にて）

原則的には数にはこだわらず透明性を維持していけばよい、との基本合意に達したと思われます。また昨年のWHSでは、アカデミックな企画に加えて、より健康や保健という観点でのワークショップが多かったことも踏まえて、果たしてM8（Medical）で進めるのか、H8（Health）の視点を重視するかの議論も行われました。

光山研究科長やCharitéのGrueters学部長からはリサーチや教育といった医学アカデミアの立場をより重視する意見が述べられましたが、必ずしも絞り込んだ結論には至りませんでした。

その後は、全体的には、Health metricsのあるべき姿、academic medical（health）centerの望ましい全体像、国際的医学教育の方法論などを中心に、基調講演と討論が行われ、M8各国大使との意見交換も行われました。

10月の第2回WHSはベルリンで開催されますが、英Imperial College Londonが中心となるようです。

主なワークショップには、Health Care, Health Challenge, Innovative Health, Global Healthなどといったキーワードとするテーマが取り上げられ、京大はResponding to the increasing complexity in medical researchのテーマに絡むシンポジウムを企画することとなりました。

M8／WHSへ京大が今後どの程度関わるべきかについては今後の展開も考慮する必要がありますが、M8メンバーの中でも特に看護教育に優れた実績のあるMonash大学と医学研究科人間健康科学系専攻との交流は7月に計画されており、アライアンス間での実質交流は個別に進める予定です。

（研究科長　光山）

地域医療連携へ意見交換

平成21年度京大病院臨床懇話会

3月14日、「平成21年度京大病院臨床懇話会」が京大会館で開催され、学内外から96名の参加がありました。

この懇話会は、地域医療との連携を推進するため、地域で活躍されている医師等の先生と京大病院診療科長等との意見交換及び京大病院からの情報提供の場として開催しているものであり、今回で13回目となります。

講演する邊見公雄先生

講演する安達秀樹先生

当日は、中村病院長及び京都府内科医会顧問の西先生の挨拶のあと、新任の宮本教授、村井教授、平家教授からそれぞれ挨拶・講演があり、続いて、三嶋副病院長から「京都大学医学部附属病院新病棟（寄附病棟）・『積貞棟』の竣工に向けて」についての報告がありました。

その後、京都府医師会副会長の安達先生から「医師が持つべき基本理念―社会保障立国論」について、全国自治体病院協議会会長の邊見先生から「生命（いのち）輝かそう京大病院関係臨床医（診療報酬と公立病院改革）」について、それぞれ中央社会保険医療協議会委員としての経験も踏まえた講演がありました。

また、引き続き開催された懇親会では、多くの医療機関の先生方から直接お話を伺うことができ、有意義なものとなりました。

退任あいさつ

成人T細胞白血病（ATL）とバイオストレス医学

ウイルス研究所感染防御研究分野 教授
淀井　淳司

昭和46年医学部を卒業し、ウイルス研究所大学院を中座して医学部免疫研究施設助手に任官した昭和50年以来、医学部とウイルス研究所に34年勤続させていただいたことになります。

偶然遭遇した成人T細胞白血病の症例報告が縁となって、臨床から基礎へ気軽に通ったことが今日までの私の研究生活を方向付けたと思います。

私は京大病院研修医時代、第一内科助手高月清博士に私淑し、ウイルス研究所病理部門花岡正男教授・増田徹助手の指導下、ヒトリンパ球のT・B細胞分類の黎明期に抗T細胞特異抗体を作製し、西南日本に本抗体と特異的に反応するT細胞白血病が存在することを報告しました。

その後、共同研究者（高月先生や1学年先輩の内山卓先生他）と共に成人T細胞白血病（ATL）としての疾患概念を提唱しましたが、これがヒト・レトロウイルス（HTLV-1）の発見につながるATL研究分野を開拓する前奏曲になりました。

ATL以前の高月清先生の優れた免疫グロブリン・多発性骨髄腫の業績の関係で、アレルギー原因物質免疫グロブリンE発見者の石坂公成先生と高月先生は大変親しい関係であったため、ジョンズホプキンス大の石坂先生が京大医学部の免疫研究施設を兼任された際、増田助教授と共に大学院中退で同施設の助手のポストをいただいたことも、回顧するとその後の免疫アレルギー学とウイルス感染症への宿主側の応答機構～生体応答学～への方向性が定まる一因であったとも思われます。

その自然な流れでHTLV-1ウイルス感染ATL細胞株やアレルギーにも関係深いEBウイルス感染B細胞株が産生する抗ストレス・抗炎症タンパク、チオレドキシンを見出すことになり、セリエ以来のストレス学説を今日の医生物学の立場で再考する方向が私の目標になりました。

総合科学技術会議議員時代の井村裕夫先生（元総長）と石坂先生のご指導で、経産省関連の最初の独立行政法人・産業技術総合研究所（池田）にヒューマンストレスシグナル研究センター～石坂・淀井特別研究室を開設して京都と池田を往復した時代（平成13～16年）も、その一環のエピソードです。

審議官が交代するたびに方針が揺れ動く産総研の生態学も体験しましたが、この石坂・淀井特別研究室の英文名称を［バイオストレス］としたことが、その後の研究会［バイオストレスを考える会］を経て、京大退職後のNPO法人JBPA《日本バイオストレス研究振興アライアンス》のキーになったことも偶然・必然を感じさせる流れです。

「主題と変奏」「不易流行」という言葉が　種々の学芸・芸術の世界では何よりも重要であります。

彫刻の世界に生きた叔父が、ロダン、ブールデル、高村光太郎などを目標に自らの独自の世界を求めた足跡が作品の流れに読み取れます。

芸術と科学は別のプリンシプルとの実学的見解も重要ですが、基礎・臨床医学研究も含めたバイオサイエンスにおいて、網羅的にテーマを狩猟する行き方は若い世代の研究者に最も戒めるべきことであると思っています。

また教室・学問の名称を5年程度で気軽に変更する風潮は、継承すべき学の内実の空洞化に繋がることを危惧します。

研修医時代ATLが契機となり、ウイルス研究所と医学部で当初引き受けたバイエル寄附講座や探索医療TRXプロジェクト［平成15～20年］など、医学部とウイルス研究所の間を往復しての京大生活でしたが、ウイルスとウイルス疾患がある限りウイルス研究所のミッションは褪色しませんし、京都大学メディカルセンターに独立不羈の伝統を持つウイルス研究所が果たすべき役割は今後も大きいと思います。

「病理診断学」の普及を目指して

医学研究科基礎病態学（発生病態学）
・附属病院病理診断部 教授
真鍋 俊明

平成22年3月末日で、京都大学教授を定年退職いたし、滋賀県立成人病センター研究所長および病理診断科長に就任いたしました。京都大学には、平成14年からの8年間お世話になりました。この間、無事に務めることができましたのは、京都大学医学部医学研究科および芝蘭会会員の皆さま方のお陰と感謝申し上げます。

昭和46年に山口大学を卒業し、直ちに渡米、インターン終了後、アルバート・アインスタイン医科大学で病理レジデント、ニューヨーク医科大学で講師、助教授として過ごしておりましたところ、川崎医科大学から我が国に米国型の病院病理部を作る手伝いをしてほしいとの要請があり、昭和52年10月に帰国いたしました。以来、我が国に適した病理診断部のあり方、教育方法を模索するとともに、病理組織診断へのアプローチの仕方を組織パターンの認識、それによる疾患の分類に求め、皮膚病理学、肺病理学を体系づけてまいりました。平成14年から場所を京都大学病院へ移し、病理部が臨床の一部門として機能し、各科との連携が取れた組織となること、病理検体、ホルマリンの一括した取扱いを行う設備と体制を作ること、病理検体を使用した研究を支援・促進すること、病理診断医、研修医や学生へのより良い教育体制を作ること、関連病院を整理・支援すること、を目指してやってまいり、お陰さまでこの多くを成

し遂げることができました。

病理診断部は、多くの臨床科と関連し、それぞれを連結する要ともなる部署です。これから先、この組織を上手く利用していただきますとともに、より良いものに育てていってほしいと願っております。医学研究科では、附属総合解剖センターの各部門の充実を図り、学部研究者への形態研究支援の機能を持たせることができましたし、大学院では「病理形態・病態医学」コースとして形態研究の理論を教え、実習が行える場所とすることができました。また、この間、学会を通じて、あるいはセミナーを通じて、またいろいろな機関を通じて病理に関する多くのことを発信できました。

京都大学医学部は百年を超える歴史の中で、優れた人材を輩出し、純粋に学問を追究し、常に世界や日本の医学界に向けて多くのことを発信し続けています。そのような環境に身を置けたことは望外の喜びです。

今後は、滋賀県立成人病センターの笹田昌孝総長の下で、滋賀県を中心とした病・病、病・診連携の一環としての病理診断ネットワークの形成に邁進したいと考えています。

これからの京大医学研究科および附属病院の益々の発展と皆様方のご健勝を祈念いたしますとともに、芝蘭会の皆様には今後ともさらなるご指導、ご支援を賜りたいと切にお願い申し上げる次第です。

新任あいさつ

柔軟さもつシステム 基盤に

大学院医学研究科 発達小児科学 教授
平家　俊男

平成22年3月1日より発達小児科学教授を拝命いたしました。伝統ある教室を主宰するということで、身の引き締まる思いを強くいたしております。ここに芝蘭会の皆さまにご挨拶を申し上げます。

私は昭和54年京都大学を卒業し、大学病院での小児科研修の後、財団法人田附興風会医学研究所北野病院において、小児科全般にわたる研修を2年間行いました。

私が小児科という診療科を選択した大きな理由は、ヒトの発達・発育に対して、ダイナミックにかかわることができる診療科という理由です。

北野病院において、多くの一般小児科疾患とともに多分野にわたる難治性疾患を経験し、難治性疾患の克服に向けて多方面からの疾患研究を希望し、大学院に進学いたしました。その中で、原発性免疫不全症に対する造血幹細胞移植、その過程で生じた幹細胞の臨床展開において大きな問題意識を抱いたことで、一時期、東京大学医科学研究所にも籍を置きました。2000年より再び京都大学医学部小児科准教授として帰学し、免疫アレルギー血液疾患を中心にしながら、発達・発育・その障害という観点より臨床、研究に携わる中で現在に至りました。

小児科は小児の成長とともに歩む診療科です。ご家族が安心してお子さんを育てていきながら、治療に専念できる小児医療基盤の確立は、総合診療科としての小児科には必須の事項です。

京都大学医学部小児科学教室は、明治36（1903）年に平井毓太郎教授を初代教授として開校しました。当時の貴重な写真を垣間見ると、小児科外来において患児間の感染を防御するため、独立した出入り口をもつ10個の別室の整備、小児科小学校の整備等、非常に斬新なアイデアがちりばめられています。また、当時原因不明の疾患として治療に難渋していた「所謂髄膜炎」が、白粉による鉛中毒であることを見いだされ、その後の「所謂髄膜炎」に対する診療に大きく貢献されました。京都大学医学部小児科学教室には、このように時代の要請にこたえるべく柔軟に対応するという素地が宿っています。

京都大学医学部小児科には、臨床、研究、教育というミッションが課せられています。一方、小児科は単科でありながら、多種多様な疾患を内包します。単なる育児不安から、先進医療開発のモデルケースとなる難治性疾患まで、守備範囲は広範囲です。さらに、家族や地域など、多くの社会的要因も加味する必要があります。このようなさまざまな状況に対応するためには、剛直な臨床、研究、教育のシステムではなく、柔軟さを併せ持つシステムを基盤にするしかありません。教室の先人たちが培ってきた魂をもって、これらの課題に取り組んでいきたいと思います。

京都大学医学部小児科は、2002年に100周年を迎えました。50年後、100年後の小児科の未来はどのようなものであるか想像のすべはありませんが、活気ある着実な一歩を刻み続け、待ち受ける課題に対しても、後人たちが力を併せて紐解いてくれることができるような小児科を目指していきたいと考えています。

皆さまのご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金（KMS・FUND）だより

事務局
〒606-8302
京都市左京区
吉田牛ノ宮町11-1
芝蘭会館別館
Tel.075-761-2467
Fax.075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund @ office.med.kyoto-u.ac.jp

優秀論文の入賞者を表彰

医学部校友会総会

21年度は7人受賞

京都大学医学部生と医学研究科大学院生の父母らを中心とした「京都大学医学部校友会」の第3回総会が、五月晴れの中5月2日（日）午後1時から、芝蘭会館本館「稲盛ホール」で開催された。

校友会総会・講演会は校友会員160名、医学研究科教授15名、KMYIA受賞者12名等の出席を得て開催され、稲盛ホールはほぼ満席の状態であった。

総会は、加藤正昭医学研究科事務部長の司会で進められた。まず土井赳校友会会長から挨拶と21年度の事業報告、会計報告が行われた。挨拶では医学部の教育の充実と研究の発展の支援のために、校友会としては間接的な方法として、教育研究支援基金（KMS・FUND）への貢献に力を入れ、基金の事業である若手研究者表彰の支援や、学生会館の完成に向けて、さらに活動を推進したいので会員の協力を求める旨の要請がされた。また、報告は、いずれも会員の拍手によって承認された。

次に、光山正雄医学研究科長・医学部長から、学生厚生施設建設における皆さんの多くの寄附に対する謝辞、またさらなる支援をお願いする旨の挨拶が行われた。

また、教育研究支援基金（KMS・FUND）の支援事業として、京都大学医学部に所属する院生、研究生等を対象とした表彰制度「京都大学医学部表彰制度」の創設により、京都大学医学部若手研究者優秀論文賞KMYIAの受賞者が決定したことも報告された。

今年はKMYIA発表後初めての総会となり、平成20年度5名、平成21年度7名の受賞者に対する表彰式が併せて行われた。それぞれ優秀論文に選ばれた研究者計12名には表彰状と副賞が、光山医学研究科長から授与され、格調の高い総会となった。（平成21年度の受賞者は別表の通り）

続いて、肝胆膵・移植外科学の上本伸二教授の司会で、医学研究科4名の先生による講演会が開催された。

まず、光山医学部長が京都大学の理念について講演され、「Number One でなくともOnly One たれ」「京都大学医学部の学生であることを誇れ、されど奢るな。」などと話され、聞いている方が身の引き締まる思いでした。良い医療人と共に次世代に繋がる優れた研究者の輩出こそ京都大学に求められている使命であることも強調されていた。それに対する取り組み、施策が紹介された。

次に、教育改革に取り組まれた、医学教育推進センター長、平出敦教授は、医学部の機構改革と、優秀な人材をいかに育てるかに苦慮された話などで、現代の若者はコミュニケーションが苦手、特に知らない人とは話せない人が多いことから、入学直後琵琶湖畔で開催されるセミナーでのコミュニケーション術を鍛える取り組み等も紹介された。

乳腺外科学の戸井雅和教授は、乳がんが2000年以降女性の癌発症のトップになったこと、50代が発症のピークであることを話され、イソフラボンを多くとること、肥満を避けるなどライフスタイルの注意点も話された。

社会疫学の木原正博教授からは世界エイズ流行の新局面について、アフリカ、欧米諸国が現在小康状態を保っている一方、日本、台湾、韓国、中国など東アジアにエイズ流行の波が来ている。今後連携を強化し予防に備える必要があり、今後10年くらいでわれわれも周りで遭遇する可能性が高くなることを警告された。

校友会総会で行われた優秀論文表彰式

平成21年京都大学医学部若手研究者優秀論文賞（KMYIA）受賞者

【基礎研究部門】

佐野　晃之　分子生物学　博士課程（医学専攻）1年
論文題目：Regulation of the innate immune response by threonine-phosphatase of Eyes absent
掲載雑誌：Nature Vol.460,520-524,2009

吉見　一人　実験動物学　修士課程（医科学専攻）2年
論文題目：Enhanced colitis-associated colon carcinogenesis in a novel Apc mutant rat
掲載雑誌：Cancer Science Vol.100,2022-2027,2009

中西　秀雄　眼科学　博士課程（医学専攻）4年
論文題目：A Genome-Wide Association Analysis Identified a Novel Susceptible Locus for Pathological Myopia at 11q24.1
掲載雑誌：PLoS Genetics Vol.5,e1000660,2009

坂田　大治　神経・細胞薬理学　研究員
論文題目：Prostaglandin E2-EP4 signaling promotes immune inflammation through Th1 cell differentiation and Th17 cell expansion
掲載雑誌：Nature Medicine Vol.15,633-640,2009

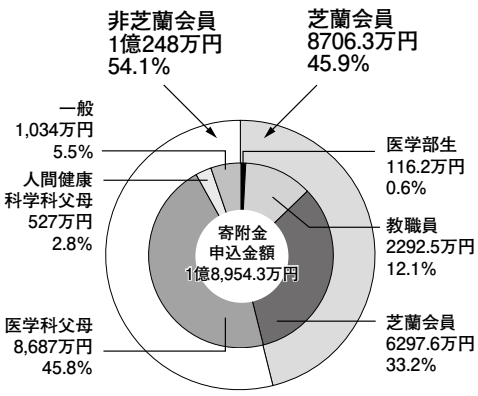
【トランスレーショナルリサーチ部門】

平田　英周　脳神経外科学　博士課程（医学専攻）4年
論文題目：Endogenous tenascin-C enhances glioblastoma invasion with reactive change of surrouding brain tissue
掲載雑誌：Cancer Science Vol.100,1451-1459,2009

木下　秀之　内分泌・代謝内科学　研修員
論文題目：T-Type Ca2+ Channel Blockade Prevents Sudden Death in Mice With Heart Failure
掲載雑誌：Circulation Vol.120,743-752,2009

日下部　徹　内分泌・代謝内科学　法務省職員
論文題目：Beneficial effects of leptin on glycaemic and lipid control in a mouse model of type 2 diabetes with increased adiposity induced by streptozotocin and high-fat diet
掲載雑誌：Diabetologia Vol.52,675-683,2009

KMS-FUND 寄附申込金額
平成22年5月14日現在



寄附金1億9千万円に
さらなるご支援を

医学部教育研究支援基金KMS・FUNDは設立より4年目に入りました。新たな活動として、昨年からは若手優秀論文表彰が始まり、また、秋には学生会館の竣工が控えております。これまで大勢の方々のご理解とご支援によりましてここまで進んでまいりました。

本年5月で、寄附申込者1156名、寄附申込額は1億9千万円に近づきました。しかし、総工費、維持費等財務面では大変厳しい状況が続きます。校友会、芝蘭会、教職員の皆様には、今後ますますのご理解とご支援を賜りますようにお願い申し上げます。

人間を考える霊長類学

松沢教授特別講演

4先生の講演後、高橋良輔教授による紹介を受け、稲盛ホールで京都大学霊長類研究所長の松沢哲郎教授の講演「新しい霊長類学―人間の心とチンパンジーの心」が行われた。

松沢教授

最初に、霊長類というとサルを考えるが、ヒトも霊長類であること、またチンパンジーはヒト科に属することから話を始められた。人間とチンパンジーの赤ちゃんを比較するとき決定的に違うのは、人間の赤ちゃんは仰向けに寝られることを指摘された。「人間は寝ていても手が自由になることで、進化を遂げられた。生まれながら目と目が合い、いろいろなコミュニケーションを図ることができたからです」と説明された。

次に、松沢先生たちが取り組んでおられるアイプロジェクトの研究成果から、チンパンジーのアイとその子供のアユムの数字の瞬間記憶能力について話された。チンパンジーのアイとアユムに1から9までの数字を順に教える。パネルにばらばらの位置に約0・7秒、一瞬だけ数字を写した後にすぐに白い四角形で隠してしまう。するとアイとアユムは1から9の配置を記憶しており、1から9の順に配置されていた四角をタッチすることができる。同じことを人間の子供や大人で訓練してもとても0・7秒のような短い時間でその配置を正確にタッチすることはできないという興味深い実験結果を示された。

この結果から、松沢先生は、「チンパンジーは今この瞬間のみに生きており、人間は進化の過程でこのような能力を失う代わりに言語を取得し、過去を思い、未来を想像する生き物になったのではないか」と講演をしめくくられた。

松沢先生の講演はお話だけではなく、アフリカのフィールドワークでチンパンジーの子供が母親の真似をして木の実を石を使って割る様子やアイとアユムの学習の様子を動画を使って説明されたので非常に判りやすく、「人間とは何か」をチンパンジーの行動を通して考えることができ、有意義なひとときを過ごすことができた。

卒業・入学の祝賀会を開催

「卒業記念祝賀会」

平成21年度京都大学卒業式が3月24日（水）に京都市勧業館「みやこめっせ」で挙行され、それに引き続き、医学部学士号授与式が芝蘭会館・稲盛ホールで行われた。

医学部長・光山正雄教授からの祝辞、学士号授与の後、山内ホールにて校友会主催の「卒業記念祝賀会」が開催された。

参加者は光山医学部長を含む教授、卒業生104名、父母など関係者92名のほか200名を超える盛大で和やかな祝賀会となった。

光山医学部長からの祝辞、出席教授の紹介後、土井赳校友会会長の乾杯の発声で祝賀会が始まり、京都大学医学部音楽部の皆さんによる室内楽演奏の中、懇談の後、出席教授からの祝辞、卒業生川田交俊さん、篠原浩さんからの謝辞、父母を代表して安田孝様からの挨拶もあり、和服姿も見られる卒業記念祝賀会は、華やかな雰囲気の中で上本伸二教授（肝胆膵・移植外科学）による閉会の辞によりお開きとなった。

「入学記念祝賀会」

4月7日（水）に京都市勧業館「みやこめっせ」で行われた平成22年度京都大学入学式の後、芝蘭会館本館・山内ホールにて、父母など関係者を交えての校友会主催の「入学記念祝賀会」が開催された。光山医学部長からの祝辞の後、京都大学医学部教育研究支援基金（KMS・FUND）と京都大学医学部校友会の説明がKMS・FUND委員高橋良輔教授より行われ、土井赳校友会会長の乾杯の発声で祝賀会が始まった。

祝賀会は、京都大学医学部音楽部の皆さんによる室内楽演奏の中、出席者が各テーブルに分かれて歓談した後、出席教授の紹介および祝辞、在校生の伊藤寛朗（5年生）さんからの励ましの挨拶があった。父母を代表して清水良和様、長野公昭様の挨拶があり、教授、学生109名、父母などの関係者124名のほか240名を超える出席者で、大変にぎやかな祝賀会となり、京都大学医学部教育研究支援基金（KMS・FUND）委員長の中尾一和教授の閉会の辞で終了した。

「会員相互の親睦を期す」

設立時　唯一のスローガン

芝蘭会の原点を検証する

「明治三十九年、にほひ草なる芝蘭の名前の下に、我等の一大集団の基礎が確立した。以来二十四星霜、我々は牢固たる芝蘭会気質を、知らず知らずの中に構成しえた。……併し我々会員の中に如何なる意志の疎通を図る機関があろう。我々を打って一丸とすべき、如何なる原動力が存在しよう。我々は分散より結成に向かって邁進しなければならない。……『芝蘭会会員相互の親睦を期す（る）』なるスローガンの下に先輩と学生との堅き結合の契機となり、偉大なる研学探求の揺籃たらんことを祈願する。……」。これは昭和四年創刊の芝蘭会雑誌の「発刊に際して」に記された文章の一部である。「会員相互の親睦を期する」は明治三十九年芝蘭会設立時の会則に唯一の目的として掲げられたスローガンであり、芝蘭会の原点として私たちが引き継ぎ発展させ、次代に伝えていくべき理念である。

芝蘭会理事　中安　顕（昭和41年卒）

次代に伝えるべき理念

「会員相互の親睦を期する」なるスローガンにどのような期待があったのだろうか？　広辞苑では「親睦」「期する」とはそれぞれ「親しみ合うこと、なかよくすること」「約束する、ちぎる」とあるので「会員が互いに仲良くすることをちぎる」ということになる。

当初の芝蘭会雑誌には毎号親睦旅行の記事が満載されており、肌で触れ合う交流を大切にしていた。そしてその家族的な雰囲気を維持しようとしたが、年を追って会員数が増加し、密接なコンタクトが続けられなくなったため、芝蘭会雑誌・会報や支部総会が親睦維持のための貴重な手段となっていたのであろう。

昭和十六年には、芝蘭会を単なる親睦団体より引き上げ、会員相互の親睦を計ると同時に、会員相互の向上と練磨を計る団体と決議された。

偉大なる芝蘭会先輩達は沈滞する芝蘭会の活性化のため、会員の一致団結を目指して弛まぬ努力をされてきた。しかし未だその道は遠いと言わざるを得ない。

◇

「会員相互の親睦を期する」を今流に解釈しようとすると、次のようなキーワードが浮かぶ。ネットワーク、パートナーシップ、コミュニケーション、リレーションシップ、組織コミットメント、帰属意識、人脈、コミュニティー等々。

芝蘭会雑誌創刊号「発刊に際して」において注目すべき記述がある。

「分散より集団へ、集団より社会へ、生活意識の存在する所。そこに力強い連鎖を生ずるは当然の理である」、この一文の中には、前掲の全てのキーワードが包含されている。芝蘭会をコミュニティーと捉え、強力な連携を生み出そうとする未来志向の意識が八十年前の芝蘭会において既に芽生えていたのである。

◇

芝蘭会は京大医学部コミュニティーにおけるコミュニケーションの核としての役割を果たすことが期待される。それには京大医学部コミュニティーにおいて芝蘭会が、共通の言語としての「存在感」が認識されることが、必要である。

それは大学と芝蘭会の連携においても実行されている。十三回目を迎えた芝蘭会臨床懇話会（九回目から京大病院臨床懇話会と改名）は、大学と芝蘭会が協力して大学病院の発展のために貢献する、（両者の役割を組み合わせ意味のあるプロジェクトを最適の形で推進する）社会工学的アプローチによるプログラムである。

◇

芝蘭会が発展するための活動の主役は芝蘭会会員である。会員（会費納入者）数の増加は芝蘭会成長の重要なパラメーターである。

芝蘭会会員（会費納入者）数の経緯を見ると、平成十五年度が六千二百人、十六年度五千七百人、十七年度六千五百人、十八年度・十九年度五千五百人、二十年度六千二百人であり全体として増加の傾向が見られない。芝蘭会名簿に記載された会員数の半数程度が実質会員という現状であり、実質会員数を増やす方策が必要である。

京大医学部コミュニティーに向けて芝蘭会の今後の役割を明確なビジョンとデザインとして示さなくてはならない。

芝蘭会設立当時は医学部学生の芝蘭会に対する関心は大きく、芝蘭会と学生との繋がりは確固としたものであった。

芝蘭会の将来を考えるとき、学生の大学に対する帰属意識の高まりは大きな資産となる。

大学に対する帰属意識は在学中から涵養されるべきであり、学生として将来にわたり大学や同窓会との関係を持ち続けたいと考えることができれば、彼らは、大学は自分たちのものであると意識し大学を支えようとするであろう。

京都大学の卒業生は大学への帰属意識が希薄であるといわれるのは何故なのか？「自由の学風」は、京都大学の「輝く個性」として今後も継承・発展させていくべきであるが、自由の名のもとに団結することを忘れ一匹狼的になり、「団結しない京大気質」になってしまっているのではないだろうか？

自由の名のもとに団結忘れた気質？

（終わりにあたり芝蘭会の資料をご提供いただいた芝蘭会雑誌部の方々、資料の作成にご協力いただいた芝蘭会事務局長の山田均様に感謝の意を表します。）

芝蘭会理事会・評議員会
22年度事業計画を承認

平成22年3月20日（土）芝蘭会館別館に於いて芝蘭会理事会・評議員会が開催された。

議案は、（1）平成22年度事業計画（案）及び収支予算書（案）について、（2）泉州支部の廃会について、（3）芝蘭会会員名簿の作成について、（4）新公益法人制度への移行についての4件。議案（1）については、医学教育活動等への助成や学生のクラブ活動への助成について、熱心な議論の上、原案どおり承認され、議案（2）については、芝蘭会泉州支部長の瀬戸評議員（市立岸和田市民病院病院長、昭和52年卒）から、芝蘭会泉州支部を解散し、大阪支部に加入したい旨の申し出があり、異議なく承認された。議案（3）については、会員名簿の作成方法と掲載内容は、平成20年度版の編集方針を踏襲することで承認された。議案（4）については、一般社団法人としての定款の変更案をもとに活発な意見の交換が行われるとともに、代議員制度の導入について、さらなる検討を行うなど、継続審議となった。

議案の審議終了後、光山会長から「京都大学医学部教育研究支援基金（KMS-FUND）」の寄附申込状況について報告があり、了承された。

芝蘭会館別館で行われた理事会・評議員会

6月26日に芝蘭会総会

平成22年度通常総会を下記の通り開催いたします。

開催には会員の10分の1以上の出席（委任状を含む）を要しますので、お手数ながら、ご出席願えない場合は、委任状に各議案に対する賛否をご指示のうえ記名捺印願い、総会日の5日前までにご返送くださいますようお願いいたします。

記

日　時　平成22年6月26日（土）午後3時～
場　所　京都市左京区吉田牛ノ宮町11-1
　　芝蘭会館 別館
議　案　1）平成21年度事業報告及び
　　収支計算並びに
　　財産目録について
　　2）平成22年度事業計画及び
　　収支予算について
　　3）評議員の選任について
　　4）新公益法人制度への移行について

芝蘭会会員名簿（69回・2010年版）の刊行について
会員登録の確認調査にご協力ください。

拝啓　会員の皆様には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、本年は芝蘭会会員名簿の刊行の年にあたり、平成22年11月末の刊行に向けて編集作業を進めております。つきましては、今回、会員の皆様のところへ「会員名簿調査確認書」（郵便はがき）及び、会員名簿購入申込用紙等をお送りさせていただきます。

会員名簿は、芝蘭会活動を活発化し、また、会員相互の親睦と交流を深めるためには、必要不可欠のものであり、名簿掲載内容の充実が求められます。それには、会員の皆様のご支援、ご協力がぜひとも必要であります。

前記「会員名簿調査確認書」を、必ず芝蘭会事務局へご返送くださいますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

敬具
平成22年6月

社団法人芝蘭会　会長　光山 正雄

支部だより

アカデミックな雰囲気で

島根支部総会記念撮影

【島根】平成21年11月21日（土）、ラピタウェディングパレスにて芝蘭会島根支部総会が開催されました。島根県立中央病院院長の中山先生の司会のもと、支部長の中川先生の挨拶からはじまりました。中川先生は先月島根の京大会という京大全体のＯＢ会にいらっしゃったそうですが、これは11年ぶりに開催されたそうです。なお、その会では医学部の人数が一番多いとのことで恒松先生が会長に就任なさったそうです。

これに対して芝蘭会の支部総会は毎年開かれていることを考えると、医学部の結びつきの強さが伺われます。

現在の芝蘭会島根支部ですが、10年前は１００名ほど会員がいたのに現在は94名しかいないそうです。島根支部としては芝蘭会の繁栄のためにぜひとも若い先生にお越しいただいてほしいそうです。また、芝蘭会の支部総会としても、若い先生が少ないことを嘆いておられました。

島根支部の当番幹事は松江市と出雲市の交代なのですが、来年は松江日赤の病院長に就任なさった奏先生が当番世話人をなさることがこの総会で決定しました。

そして、京都大学大学院医学研究科呼吸器内科学教授である三嶋先生による、京大の近況報告と特別講演が始まりました。近況報告は、運営・教育・研究体制についてや、寄付により設立される新病棟についてでした。また、京大校友会というＰＴＡのような組織ができたそうです。支部会員の先生方からの質問としては、ＭＤ-ＰＨＤコースについて、最近の男女比や出身地、マッチングの結果などについてでした。京大生は2年間外病院研修をすると3年目にはなかなか帰ってこないものの、大学院生として全部でかなりの人数が帰ってくるようです。

特別講演は「ＣＯＤＥの基礎と臨床」という題目でした。今年ガイドラインが改定されて有害物質の項に「タバコの煙を主とする」という文面が付け加わったそうです。三嶋先生いわく日本呼吸器学会はタバコを目の敵にしているそうです。最近ではテオフィリンの効果が実証されたり、チオトロピウムの副作用が否定されたりと治療法が増えてきているようです。また、呼吸器では難しいといわれていたｉＰＳ細胞も、今では病変細胞の再生に使ったりと研究の幅を広げることとなったようです。ＣＯＰＤと他の疾患との関係が深く、さまざまな病気の罹患率が高かったり、重症化するので全身疾患といわれているようです。

質問時間には、実験内容に関する質問や、再生についての質問など幅広くなされました。治験に使われるマウスは一週間はタバコを嫌がるものの、それ以後はほぼ１００％が喜んで吸うそうです。遺伝子との関係に関する質問も出ましたが、目下研究が進められている段階だそうです。

このように、たくさんの質問が出て、とてもアカデミックな雰囲気のなか、三嶋先生も熱心にお答えしておられました。

講演のあとは、懇親会へと移りました。まず三嶋先生のお話でしたが、中山先生と同級生だった話に始まり、あまり真面目ではなかった学生生活についてなど、偉大な先生とは思えない面白いお話を聞かせてくださいました。そして他の先生方も順に近況報告なさいましたが、総じて人員不足で困っているようでした。科が閉鎖されたり、たった一人でまわしていたり、地域医療の崩壊が始まっていることを実感させられました。大先輩方に囲まれて緊張していましたが、出雲の観光案内をされたり、和気藹々と私たち学生にも話しかけていただきました。そのようにして、終始和やかな雰囲気で進行し、惜しまれながらもお開きとなりました。（文責：３回生　宗宮伸弥）

厚労行政や不妊治療学ぶ

東京支部総会記念撮影

【東京】平成22年2月13日（土）、学士会館にて、平成21年度芝蘭会東京支部総会ならびに第８回京都大学健康科学フォーラムが開催されました。支部長の日野原重明先生の挨拶で始まりました。

京都大学からは、芝蘭会会長の光山正雄先生がいらっしゃり、挨拶と京都大学医学部の運営体制・学生会館などについての説明をされました。

続いて二つの講演が行われました。まず一つ目は、首藤健治先生（厚生労働省大臣政務官室調査官、京大医・平成３年卒業）による、「最近の厚生労働行政の動きから」でした。医療政策の現状、そして舛添大臣（当時）のもとでの「安心と希望の医療改革ビジョン」についての、舛添大臣のもとで働いていた首藤先生ならではの大変興味深い内容のプレゼンテーションでした。

次に二つ目は、辰巳賢一先生（梅ヶ丘産婦人科院長、京大医・昭和54年卒業）による、「不妊治療最前線」でした。不妊治療が医療として成立するようになったのは、１９６０年代からであり、このころから排卵誘発剤が治療に使われ始めたそうです。70年代に、顕微鏡を使って閉塞した卵管を開通させる顕微鏡下手術が開発されますが、当時は不妊治療による妊娠の確率は決して高いものではなかったそうです。ここに一大変革をもたらしたのが「体外受精・胚移植法」の登場。体外受精は、不妊の原因である閉塞した卵管を使わずに、体外で卵子と精子を受精させる方法であり、そこから派生したさまざまな高度医療を「生殖補助医療」と総称するようになったそうです。辰巳先生は、日本で本格的に体外受精への取り組みが始まった86年ごろから、大学の研究チームの一員として不妊治療に熱意を注いでこられました。「当時は、体外受精で生まれた赤ちゃんは珍しかったのですが、今では出生児の１００人に１人が体外受精による妊娠です。不妊治療を受ける女性の意識も変わり、生殖補助医療に対する抵抗が少なくなってきました」と、辰巳先生は時代の変化を語っておられました。

その後、写真撮影を終えて懇親会が行われました。日野原重明先生の乾杯の音頭で開会されました。支部長の日野原先生は、99歳というご高齢でありながらも現役の医師としてご活躍なさっているそうです。参加されている先生方の近況報告を兼ねた挨拶もあり、興味深いお話をたくさん聞くことができました。

またいろいろな先生に話しかけていただき、今とは違う当時の京大の様子や関東の病院の様子についても聞くことができました。東京支部はとても人数が多く、総会にもたくさんの先生方が参加しておられ、懇親会はとても盛り上がっていました。

そして会は終始盛況となり、にぎやかな雰囲気のままお開きとなりました。最後に、このような貴重な会に参加させていただきありがとうございました。（文責：３回生　中村有輝）

参加者増にうれしい悲鳴

【神戸】平成22年2月11日（木・祝）、兵庫県医師会館にて学術講演会および神戸支部総会が行われました。参加者は１００名近く、とても大きな会となりました。

神戸支部長である吉田先生の挨拶により会は始まりました。最初は京都大学医学部医学研究科呼吸管理睡眠制御講座の教授である、陳和夫先生のご講演でした。座長は神戸中央市民病院の富井先生がなさいました。演目は「睡眠時無呼吸を含む睡眠呼吸障害とその対策」というものでした。睡眠呼吸障害のうち閉塞性睡眠時無呼吸症候群についてが中心でした。

一つ目のテーマはＯＳＡＳと糖尿病・高血圧などが要因になり、それらとあいまって重症化するということでした。二つ目は一般的に注目される血中酸素濃度ではなく、血中二酸化炭素濃度に注目してＯＳＡＳについての考察でした。酸素を投与しても酸素過剰となって換気率がおちて二酸化炭素濃度が過剰になることがあるそうです。

三つ目は呼吸反射が鈍るＲＥＭ睡眠とＳＡＳの関係でした。さまざまな治療法が存在するものの、まだ出来て日の浅い外科であるため、保険診療外のものもあるとのことでした。

続いて京都大学医学部医学研究科外科学講座・肝胆膵移植外科分野の教授である上本伸二先生のご講演でした。

座長は神戸中央市民病院の細谷先生へとかわりました。なお、陳先生と上本先生は共に昭和56年卒業だそうです。演目は「肝移植の現状と将来展望」というものでした。

一つ目のテーマは移植外科の特徴でした。移植とは患者の医療アクセス権が不明瞭であったり、倫理的な問題があったりと他の科とは違う特徴があるとのことでした。ただ、日本では他の先進国のおよそ1％しかドナーがいないので海外に頼るしかないのが現状だそうです。

二つ目のテーマは肝臓移植によってＢ型肝炎が感染したという事例から、そのメカニズムが解明されたという内容でした。

またＣ型は移植後の感染では再発率が高く、進行も早いとのことです。しかし現在ＳＶＲ率は50％程度まであがってきているという実績があります。

講演会終了後には、第一楼へと場所を移して、引き続き総会と懇親会が行われました。神戸支部長の吉田先生の挨拶に始まりました。

そして陳先生がご挨拶され、上本先生がスライドを使って京都大学医学部の近況をご紹介なさいました。特にＰＴＡにあたる校友会は衝撃的なものだったようです。

初参加会員の紹介、会計報告を終え、乾杯の音頭とともに懇親会が始まりました。

なお、当初83名の参加予定でしたが、当日参加者が増え１００名近くなったため椅子がたりなくなり、幹事の先生方はうれしい悲鳴をあげておられました。

神戸支部の特徴は比較的若い先生方が多く、全体の人数が多いためおよそ4世代にもわたる幅広い年齢層の方々とお話できることが最大の強みだそうです。

また、初参加の先生も毎年何名かいらっしゃるので、今年いかれなかった方も敷居が低いので来年はぜひ参加してみてください。

先生方もご高名な方が多い中、和気藹々と、学生にも積極的に話しかけていただきました。

特に神戸中央市民病院院長の北先生は、普段の威厳ある様子からは想像もできないような面白いお話を聞かせていただけました。

このようにして、終始和気藹々とした雰囲気で進行し、惜しまれながらもお開きとなりました。（文責：３回生　宗宮伸弥）

支部だより

支部だより

学術講演会に看護師らも

［和歌山］ 平成22年2月14日（日）、ダイワロイネットホテル和歌山にて、芝蘭会和歌山支部総会・懇親会が開催されました。

支部長である日本赤十字社和歌山医療センター院長小西先生の挨拶から学術講演会は始まり、同副院長である百井先生司会のもとで進めました。

学術講演会では京都大学大学院医学研究科長である光山先生が招かれ、「細菌の感染戦略に関する新たな知見」という演題で講演をされました。

学術講演会には医師だけでなく看護師の方々などが多数出席しておられ、会場は満員御礼の状況でした。光山先生も看護師の方にもわかりやすく話すとのことでした。内容につきましては、病原性の説明から始まり、最近の侵入因子であるTTSS（Type Ⅲ Secretion System）に力を入れて説明されていました。これはニードルとシリンジのような構造で、細胞内にエフェクタータンパクを注入し、アクチンを再編成することで細胞内に侵入するとのことです。次に食細胞による殺菌の機構を説明された後、その殺菌から逃れるエスケープ機構を持つ細胞内寄生菌について話されておられました。そのひとつである結核菌についてはBCGとの違いについて触れながら、最新の分子メカニズムを紹介されていました。さらに光山先生が長年研究しておられるリステリアについてもそのエスケープ機構についておよそわかってきたと話をされていました。講演の終了後には活発に質疑応答が交わされ、活気ある講演会となりました。

講演会終了後、場所を移して総会・懇親会が開かれました。

総会は支部長小西先生の挨拶で始まり、会計の直川先生による会計報告、光山先生による京都大学病院の現況と順次進んでいきました。

懇親会は日本赤十字社和歌山医療センター名誉院長前川先生の乾杯の音頭で始まりました。会は終始和やかな雰囲気で、先生方はわれわれ学生にもやさしく声をかけてくださり、大先輩方の学生時代のことや、日本赤十字社和歌山医療センターでの研修医期間の話など、非常にためになる話を聞かせてくださいました。会が進行すると、一人ずつ自己紹介ということで順番にマイクがまわされ、ユニークな話をされる先生もおられ非常に盛り上がり、光山先生も饒舌に話をしておられました。そして宴もたけなわとなり、会は惜しまれながらも解散となりました。

最後になりましたがこのような貴重な会に参加させていただき感謝の意をもって、和歌山支部総会・懇親会の報告を終わらせていただきます。

（文責：3回生　山田直生）

和歌山支部総会記念撮影

人事異動

発令年月日	氏名		異動内容
H22.2.28	飯沼　由嗣	辞職	臨床病態解析学臨床病態検査学准教授より 金沢医科大学教授へ
H22.2.28	土井隆一郎	辞職	外科学肝胆膵・移植外科学准教授より 大津赤十字病院外科部長へ
H22.2.28	宇谷　厚志	辞職	皮膚生命科学皮膚科学准教授より 長崎大学教授へ
H22.2.28	堀内　久徳	辞職	内科学循環器内科学分野講師より 東北大学教授へ
H22.2.28	尾池　文隆	辞職	外科学肝胆膵・移植外科学助教より 三菱京都病院消化器外科医師へ
H22.3.1	平家　俊男	昇任	発生発達医学発達小児科学准教授より 同教授へ
H22.3.15	是枝　　哲	辞職	皮膚生命科学皮膚科学講師より 関西医科大学へ
H22.3.16	松村　由美	昇任	病院助教より皮膚生命科学皮膚科学講師へ
H22.3.16	高橋　英彦	採用	放射線医学総合研究所主任研究員より 脳病態生理学精神医学講師へ
H22.3.31	鍋島　陽一	定年退職	腫瘍生物学腫瘍生物学教授
H22.3.31	真鍋　俊明	定年退職	基礎病態学発生病態学教授
H22.3.31	乾　　賢一	定年退職	薬剤部教授
H22.3.31	淀井　淳司	定年退職	ウイルス研究所教授
H22.3.31	松森　　昭	定年退職	内科学循環器内科学准教授
H22.3.31	渡邊　直樹	辞職	高次脳科学神経・細胞薬理学准教授より 東北大学教授へ
H22.3.31	谷口　善仁	辞職	遺伝医学放射線遺伝学准教授より 慶応義塾大学講師へ
H22.3.31	大森　　崇	辞職	健康解析学医療統計学准教授より 同志社大学准教授へ
H22.3.31	野瀬　謙介	辞職	感覚運動系外科学形成外科学准教授より 城北病院副院長へ
H22.3.31	大久保憲一	辞職	器官外科学呼吸器外科学准教授より 東京医科歯科大学教授へ
H22.3.31	高橋　建造	辞職	皮膚生命科学皮膚科学講師より 琉球大学准教授へ
H22.3.31	岡本　晋弥	辞職	外科学肝胆膵・移植外科学講師より 大津赤十字病院小児外科部長へ

発令年月日	氏名		異動内容
H22.3.31	伊丹　　淳	辞職	外科学消化管外科学講師より 西神戸医療センターへ
H22.3.31	依藤　　亨	辞職	発生発達医学発達小児科学講師より 大阪市立総合医療センターへ
H22.4.1	久場　博司	昇任	生命科学系キャリアパス形成ユニット講師より 高次脳科学神経生物学准教授へ
H22.4.1	小川　　正	昇任	高次脳科学認知行動脳科学講師より 同准教授へ
H22.4.1	石崎　敏理	昇任	高次脳科学神経・細胞薬理学助教より 同准教授へ
H22.4.1	寒水　孝司	採用	大阪大学特任准教授（常勤）より 健康解析学医療統計学准教授へ
H22.4.1	藤本　新平	昇任	内科学糖尿病・栄養内科学講師より 同准教授へ
H22.4.1	髙倉　俊二	昇任	検査部講師より 臨床病態解析学臨床病態検査学准教授へ
H22.4.1	岡部　　寛	昇任	外科学消化管外科学講師より同准教授へ
H22.4.1	椛島　健治	採用	ＡＫプロジェクト特定准教授より 皮膚生命科学皮膚科学准教授へ
H22.4.1	谷岡　未樹	昇任	福井赤十字病院より 皮膚生命科学皮膚科学講師へ
H22.4.1	澁谷　景子	昇任	病院助教より 放射線医学放射線腫瘍学・画像応用治療学講師へ
H22.4.1	波多野悦朗	昇任	病院助教より 外科学肝胆膵・移植外科学講師へ
H22.4.1	岡田　知久	採用	特定講師（産官学連携）より 放射線医学画像診断学・核医学講師へ
H22.4.1	長谷川　傑	採用	天理よろづ相談所病院手術部副部長より 外科学消化管外科学講師へ
H22.5.1	西小森隆太	昇任	病院助教より 発生発達医学発達小児科学准教授へ
H22.5.1	黄　　政龍	採用	香川大学准教授より 器官外科学呼吸器外科学准教授へ
H22.5.1	渡邉健一郎	昇任	病院助教より 発生発達医学発達小児科学講師へ

会員訃報　（敬称略）　謹んでご冥福をお祈りいたします。

井上　道則	（昭和16年12月卒）	平成22年2月12日	ご逝去
山形栄一郎	（昭和16年12月卒）	平成20年11月15日	ご逝去
森　　喬	（昭和17年専卒）	平成22年2月11日	ご逝去
光藤　由己	（昭和18年卒）	平成22年4月13日	ご逝去
元山　　登	（昭和18年卒）	平成21年4月24日	ご逝去
木下　哲次	（昭和19年卒）	平成22年4月27日	ご逝去
森田　雅夫	（昭和19年卒）	平成22年3月2日	ご逝去
千田　重男	（昭和21年薬卒）	平成14年12月23日	ご逝去
飯塚　　治	（昭和22年卒）	平成21年9月1日	ご逝去
西村儀一郎	（昭和23年専卒）	平成18年11月28日	ご逝去
雲井　健雄	（昭和24年卒）	平成21年12月2日	ご逝去
越　　哲也	（昭和24年卒）	平成21年9月8日	ご逝去
鎌田昭二郎	（昭和24年専卒）	平成22年2月3日	ご逝去
伊達　慶宗	（昭和24年専卒）	平成22年4月26日	ご逝去
山下　俊明	（昭和26年専卒）	平成21年6月5日	ご逝去
辻野　博之	（昭和27年卒）	平成22年3月3日	ご逝去
日野　健三	（昭和28年薬卒）	平成21年11月18日	ご逝去
佐々木　博	（昭和29年卒）	平成22年3月24日	ご逝去
室賀　龍夫	（昭和32年卒）	平成21年10月20日	ご逝去
津本　洋一	（昭和33年卒）	平成22年3月17日	ご逝去
山本　幹男	（昭和33年薬卒）	平成20年12月7日	ご逝去
安藤太一郎	（昭和35年卒）	平成22年1月16日	ご逝去
真城　　巌	（昭和40年卒）	平成22年1月7日	ご逝去
扇谷　　明	（昭和47年卒）	平成22年3月14日	ご逝去
今井　眞人	（昭和48年卒）	平成21年5月15日	ご逝去
岸谷　幹夫	（教室会員 病理学）	平成21年11月12日	ご逝去
上田　　治	（教室会員 精神科）	平成21年7月23日	ご逝去
木村　幾生	（教室会員 放射能・核医学）	平成19年10月28日	ご逝去

芝蘭会報編集委員会
委員長　中尾一和
委　員　斎藤信雄、岩田征良、豊國伸哉、山田圭介、園部　誠、阿部　恵
芝蘭会雑誌部
顧　問　中尾一和
部　員　尾市雄輝、亀井純（以上6回生）
植木一仁、武井玲生仁、水野裕基、福永有伸、畑玲央（以上5回生）
合田直樹、福田宗寛、勝島將夫（以上4回生）
橋本健太郎、中村有輝、山田直生、畑野翔太郎、前田峻宏、宗宮伸弥、柳井谷駿史（以上3回生）
芝蘭会事務局
事務局長　山田　均
総務課長　秋山和美
管理課長　松本　悼

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であります。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会で決めさせていただきます。

芝蘭会報　編集委員会

●事務局から●

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますのでご了承ください。（FAX 075-752-4015）